

## タイムリープ ～介護の今と昔～

### 第3回 入浴ケアの変遷

この企画は、介護のあり方の変化に着眼し、昔の介護を振り返り、今の介護との違いを見直そうとするコーナーです。解説は、「介護福祉経営士」情報誌 Sunにおいて「タイムトラベル～ケアの過去・現在・未来を探る旅」を執筆されている、神奈川県介護福祉士会所属の井口健一郎氏(小田原福祉会潤生園施設長)と風晴賢治氏(前常任理事)が対話形式で介護の昨今について語ります。

入浴は日本人にとって、楽しみの比重が大きい分野です。1日の生活の中で、毎日お風呂に入る人も多く、生活には欠かせない文化と言えます。今回は、『入浴』について振り返ってみましょう。

#### 【入浴の楽しみ】

風晴: 私のいる青森県は市街地でも至る所に温泉があり、まだ銭湯文化が残っています。早朝からやっている湯治場も多く、お風呂と言えば、天然温泉というイメージがあります。

井口: 湯船に入り、のびのびすることでストレスの解消と衛生保持になります。湯船に入り体温を上げて、免疫力を高めることは日本の素晴らしい健康文化です。また、お風呂を楽しむことは、長寿の国の重要な生活文化ですよ。

風晴: 施設利用者も同様で、お風呂を楽しみにしている方は多いのですが、入浴にかかる職員の肉体的労力や人手が必要となります。現在のように新型コロナウイルス感染症の影響により職員数が少ない場合等はやりくりが少々大変です。

井口: 暑い浴室などで行う入浴介助は、職員にとっても負担は大きいです。しかし、ご利用者が入浴していてリラックスしている顔を見たり、普段なかなかゆっくり話す時間がない中、入浴という1対1で関われる時間を好きだと言ってくれる職員たちもいます。ただ、入浴については、身体的な距離も近いので、感染症のリスクもありますね。

#### 【入浴サービスの発展】

風晴: 通所系サービスの利用者でも、特に冬場は自宅での入浴は寒いということや、光熱水道費のこと等を考え、入浴が一番の目的でデイサービスに通う人が多くいます。

井口: 高齢者の浴室におけるヒートショックでの死亡の事例も数多く発生しています。冬場で寒い部屋で着替え、お風呂に入る場合は、浴室のみならず、脱衣場も温めておかないとヒートショックが起きてしまいますが、自宅だとどうしても節電してしまう方も多いようですね。

風晴: デイサービスやショートステイの先駆けとして、井口さんのおられる潤生園では地域課題として浮上した入浴サービスから発展していったことをお聞きし、最初の第一歩はその地域で小さなボランティア活動から始まり、やがて自治体やマスコミが知り、その必要性を認めて国の制度に繋がっていく構図が明確に出た好事例だと感動しました。

井口: 1970年代当時、在宅介護もまだ整っていなかった時代、当時の時田施設長が地域の介護の困りごとを一軒一軒聞く中で「お風呂問題」に直面します。当時は在宅介護サービスは低所得者や身寄りのないお年寄り中心の家庭奉仕員(ホームヘルパーの前身)が活動していましたが、まだまだ支援の手が足りず、それ以上に、結婚は「家同士のもの」「その家に嫁ぐ」という「家長制度」のなごりが一般大衆の文化にまだまだありました。とくに年老いた家族の介護は嫁がするものという風潮が当たり前でした。当然の如く、体に力が入らない人はとても重いです。そんな要介護高齢者を体の小さなお嫁さんが介護することはとても大変なことでした。当時の時田施設長が訪問した際には、「うちのおじいさん1年以上お風呂に入れていなくて」というお宅もざらだったそうです。また清潔の保持の観点からも清拭が

やっつとで褥瘡がある人がたくさんおられたそうです。

そこで、ある提案をします。「うちには寝ながら入れる車もあります。寝ながら入れるお風呂もあります。日中はお迎えにあがりますから介護に慣れている専門職に任せていただけないでしょうか。おじいちゃんおばあちゃんも入居している同世代の方々と交流しながらくつろいでいただけます。施設の栄養価の高いお昼ご飯と一緒に取ってもらい、リハビリなどもしてもらいましょう」と地域住民の介護の困りごとを解消するためにボランティアで始めたものでした。また、「たまには家族も息抜きが必要でしょうから一泊二日で預かりますよ」とショートステイも始めました。こちらはテレビで大々的に取り上げられ、当時の厚生省がナイトケア事業を始める一つのきっかけになりました。「デイサービスはお風呂屋さんじゃない」と言われる方もいらっしゃいますが、デイサービスのきっかけはお風呂から始まったことは私は事実だと思います。西洋のような清潔を保つだけでなく、日本人にはお風呂は特別な意味があります。デイサービスがお風呂問題を解決するところから始まったのはいかにも日本的でいいなあとも感じています。

風晴：自宅での入浴が難しい方にとってはデイサービスでの入浴はとても大切ですよ。

そういえば、通所サービスの利用者から異性介護の問題が浮上したことがありました。女性スタッフが男性利用者の洗体をするのに抵抗を感じる人はあまりいないように思いますが、逆に男性スタッフが女性利用者の入浴介助することに強い抵抗感を感じ、別の事業所に移った女性がいました

シフトの関係や女性利用者の方が多いといった事情は有るものの、今思えば私がいた高齢者施設では、当時の女性利用者から異性介護への違和感が相談された記憶がなく、それは「仕方がない」という空気が漂っていたのではないかと今にして思います。

井口：これは制度上の問題ですよ。障害者施設は基本的には同性介助ですが65歳を過ぎたら性別はなくなるわけではないので、一律に誰でも入浴できるのではなく、しっかり利用者の主訴に合わせた個別ケアが必要になりますね。様々な場

面で男性ご利用者は女性のケアワーカーがよい、女性ご利用者も女性のケアワーカーがよい。私もショートステイで同期が女性であったので、新人で慣れない環境でケアが未熟であることとともに残念な気持ちになったことを思い出しました。

風晴：私が特養にいた時の思い出で、毎回入浴を強く拒否する認知症の女性がいました。手をかえ品をかえ、いろいろな方策を試しましたが上手くいきませんでした。ある時、偶然嘱託医の回診と入浴日が重なり、「お医者様が今日来るので、きれいにしておきましょうね。」と言うと、「そうだね」と拍子抜けしたように、あっさり入っていただけました。まさに琴線にふれた“魔法の言葉”だったんです。

井口：ある有識者は認知症ケアで一番難しいのが入浴介助で、上手に誘えば一流の人と言っていたことを思い出しました。私も現場のケアワーカー時代、お風呂嫌いのご利用者にあの手この手でお誘いしました。「お風呂入らなくてもいいので足だけ足湯につかりませんか？」など(笑)中でも、たまたま潤生園に入所したうちのおばあさんの入浴嫌いはたくさんの職員さんたちを泣かせました。あの手この手で入浴を拒否し、「今日は体調が悪いからケホッ、ケホッ」て。明らかな仮病まで使っていました。そんな中、職員たちがカンファレンスを開いてくれたんです。実はうちのおばあさんは40代からカツラで、孫の私ですら外した姿を見たことはなかった。本人の自尊心としてカツラがバレてしまうのがとても嫌だったんですね。職員たちは誘導のため、プロセスレコードをつけてくれて、たくさんのトライ&エラーをしてくれました。そういった中で若い女性の職員が「今日は二人きりで貸切風呂ですよー」と言ってくれたのが雪解けになり、それ以後、お風呂に入れるようになりました。うちの職員たちはさすがだなあと思いました。

※入浴ケアの全編は、日本介護福祉士会ホームページでお読みいただけます。

タイムリープ第4回は、ニュースVol.169  
(10月15日号) 掲載予定です。